

分科会報告及び環境自治体会議いこま会議成果まとめ

【コーディネーター】

環境自治体会議 事務局長 中口毅博

【パネリスト】

中央学院大学 教授 福嶋浩彦

山形県高島町 村上奈美子

とよなか市民環境会議アジェンダ 21 事務局次長 正阿彌崇子

中 口：最後まで残っていただきありがとうございます。パネルディスカッション形式で全国大会の成果のまとめをしていきたい。最初にパネリストの紹介をする。福嶋浩彦さんは、今は中央学院大学の教授をされていらっしゃる。



中口 毅博

福 嶋：我孫子市市長を12年、その後消費者庁長官を2年した。



福嶋 浩彦

中 口：山形県高島町役場の村上奈美子さんは、

環境が長い。

村 上：この3月まで13年環境を担当していたが、今は福祉に異動した。



村上 奈美子

中 口：村上さんは環境自治体会議の強力な助っ人。正阿彌さんは、とよなか市民環境会議アジェンダ 21 スタッフだが、色々なご経歴をお持ちだ。

正阿彌：環境をテーマにした地域のコーディネーターをしている。いろんなところで、人をつなぐ、場をつなぐ仕事をしている。



正阿彌 崇子

中 口：自治体のトップ、自治体の職員、市民活動家のメンバーでディスカッションを行う。初日に私が論点提起をし、住宅都市をモデルに、自治体の諸問題、住民・企業・自治体・研究者の役割分担などについて議論をお願いした。そこで2つの方向性が出た。1つは、市民をどうやって巻き込むか。特定の人だけが活動し、一般の人を巻き込めないことが共通の課題として浮かび上がった。そして行政の役割も各分科会の争点となった。ワークショップ形式の宝さがしフィールドワークが行われた分科会もあった。

いこま会議の成果のまとめとして、事務局長の独断と偏見で、キーワードベスト5を選んだ。ついでに、会員自治体のソフトクリーム・ジェラートベスト5も同時に発表する。

第5位は「楽しそう、おいしそう」というキーワード。ソフトクリーム・ジェラートの第5位は、福井県勝山市ラブリー牧場のジェラート。「楽しそう、おいしそう」は3つの分科会で出ている。一般の住民を巻き込むコツである。村上さん、解説をお願いします。

村 上：うちの町はすぐにできることとして、環境学習に力を入れてきた。環境を前面に出すと、来てくれる人はいつも同じ。しかも、関心のある層は既に実践されている。それ以外の人に講座に足をむけてもらえるように工夫した。環境を前面に出さないように、「食」をテーマに加えたら口コミで広がった。講座に来てくれる層が変わり、広がった。「楽しそう」は人を呼ぶキーワードである。自分ごとに置き換えられるものがない。エコクッキングや食材の保存方法など、すぐに実践できるもの、自分に得になるようなもの

のすると、キャンセル待ちとなった。

福 嶋：行政がやってもそう。私は市民運動出身である。市民活動・市民運動は、「～するべき、～であるべき」という言葉をやたらと使う。「べき」は自分の言っていることが絶対に正しくて、唯一の正解だということ。だが現実にはいろんな選択肢があって、どれが正しいかわからない。私はこれがいい・これが好きというスタンスで、「べき」という言葉は使わない。「べき」という人には、人は近づかない。

中 口：「べき」と聞いた瞬間に、楽しくなくなってしまう。

キーワード第4位は「組み合わせる」。ソフトクリーム・ジェラートの第4位は愛媛県内子町のせせらぎの里のブルーベリーソフト。「組み合わせる」にはたくさんの方ができてきた。他の政策目的と組み合わせるといふのがあるが、言い尽くされたことではないか。福嶋さんに説明をお伺いする。

福 嶋：言い尽くされているけど、まったくできていないという自覚が必要である。第2分科会（環境行政）に終わりごろ参加したのだが、自治体の問題提起の中に環境政策が出てこなかった。まちづくりのテーマに環境政策が出ていないということ。話題提供者は環境セクションの職員ではなかったが、自治体の縦割りが改めて示されたような場になった。

中 口：環境の職員が環境のセクションに居るだけではいけない。文化・歴史・健康などが気になるが、正阿彌さん解説をお願いします。

正阿彌：私は環境学習を中心に活動している。真面目な人ほど環境問題から入らないといけないと思っている。あるいは、自然環境をテーマにしないといけないと

考える人が市民団体でも行政でも多い。組み合わせることで発展するものがある。この町はどういう地形なのか、地形を見ながら災害のことを考えると環境につながってくる。食べ物とか、身近なものを組み合わせることで、いろんな人が参加できるようになる。環境分野の市民団体の人は、他のテーマのことはよくわからない。専門家同士が手を組むと見えてくるものがあるし、市民に受け入れられる。

中 口：行政の縦割りの話もあったが、異なる目的で活動している市民団体がジョイントすると、面白いことができる。

正阿彌：豊中はESDの連絡会議が10年前から活動している。ジェンダー、人権、環境に関する市民団体と行政が一堂に会する機会が3か月に1回ある。そこで話をするとお互いに知らないということがわかる。そういう機会を持つだけでも、町の見方、地域の見方が変わってくる。

中 口：村上さん、高島町の講座では健康づくりやエコクッキングを全面に出すスタイルをとられているのか。

村 上：健康づくりもそうだが、料理は満席になる。例えば、ぬる湯を推奨しているお医者さんに講演してもらおう。ぬる湯はエネルギーをそう使わないので省エネになるし、健康にもいいと話してもらおう。省エネのためにぬるいお風呂に入ろうというと嫌われるが、健康のためならその日から実践される。

中 口：そういうことも行政の役割だと感じた。

第3位は「つながりをつくる」である。ソフトクリームは、山口県宇部市ときわ公園のさぼてんソフト。「行政の役割としてつながりをつくる」という話は分科会からたくさん出た。よそものと地元をつなぐとか。よく言われることである。出会いの場

づくり、世代間のつながり、みんなが会うことについて、正阿彌さんに解説していただきたい。

正阿彌：人が集まらないと始まらない。さらにいうと、同じような人が集まっても学びはない。いろんな人が集まれる場をつくる。上から下に教える関係ではなく、お互いが学びあえる仲間をつくる。いろんな人がいて、いろんなことを考えていて、いろんな人から学べる。そういう場に出かけると、それが刺激になって、つながりができ、発展する素地になる。

中 口：いろんなつながりがある。ごみをテーマにした分科会で、ごみの分別ができなくなったお年寄りのところに中学生が行って分別を手伝う水俣市の取り組みを聞いた。学び合いながらやっていくこととして、注目できる事例である。福島さんに聞きたい。他地域との連携や連携の場づくりを行政の立場から突っ込んでほしい。

福 嶋：地域とされたが、市民とのつながりにしぼった話をする。ニセコの会議のときは、「行政をうまく使う」というキーワードが出た。しかし、市民の立場からすると新しいことではない。もう一つ踏み込むとしたら、行政がいかに市民に上手く使われることが大事かである。市民を巻き込むではなく、市民の思いに行政がどう巻き込まれるかに深めると、大きな広がりをもつ。環境問題に限らないが、無作為抽出で選んだ市民がとてもいい議論を生み出している例がある。これが使えるのではないか。

中 口：「市民を巻き込む」は、行政レベルからの視点になってしまう。市民にどう使っていたかという視点である。この辺は、次回の話題にしたい。無作為抽出に私も注目している。ドイツではそういうやり方でプランニングが行われて

いる。日本ではあまり使われていないが、静岡県の沼津市で、環境基本計画の策定に使われた。

福 嶋：環境分野では少ないが、他の分野では広がっている。この手法は、日本人向きという評価がある。日本人は謙虚であるから、私が私がと発言する人は少ない。関心がないとか意見がないわけではない。無作為抽出で選ばれ、背中を押されると、せっかくだからやってみようかと、結構参加してくれる。使わない手はない。

中 口：市民の代表性の問題で、一部の関心のある層だけで物事を決めていいのかという話がある。その解決策の一つかもしれない。

正阿弥：つながりの作り方とか場の持ち方の話がされたが、地域プロデューサーとかまちづくりコンシェルジュとか、どういう風にサポートするか。プロデューサーだけど、上からのプロデューサーではなく、広がりを作る人だと思う。まずは行政が担える。市民もできる。ただ、プロデューサーはセンスがいる。経験もいる。ネットワークがいる。地元で尽くしていないといけない。プロデューサーが浮いている例がある。つながりを広げられるプロデューサーがいる事が大事なことと、考え、プロデューサーを守るという姿勢がないと、つながりを作るだけでは発展しない。つながりを作った後をイメージできることも大事である。

中 口：確かにこれまでの行政の仕事とは違う面があり、職員が浮いている例がある。行政職員にスキルがない場合は、第三者にコーディネーター役をやってもらうことも考えられる。地域と学校をつなぐ教育支援コーディネーターは有効だろうか。

村 上：学校支援本部という仕組みがあり、地

域に精通した人と学校とつないでくれる。そういう仕組みがあると、先生が楽。すぐに活動できる場が持てるという意味では有意義だ。

中 口：第2位は「ちょっとずつ進む」。ソフトクリーム第2位は土幌町道の駅のソフトクリーム。特にどういう課題から出てきたかという、住宅都市はリタイアした住民が増えてきている。生駒市でも専門技能をもった方が定年退職されているが、第2の人生のスタートがきれない。せっかくだいいポテンシャルをもっているのに。そういう人達をいかに地域デビューさせるか。その文脈で出てきているのが雑談の中から特技を見つけるとか、少し活かせる場をつくる。高島町ではどのようにやっているのか。

村 上：声掛けして話していると、その人の得意なことが分かってくる。例えば、田んぼの生きものから環境を見ているんだ、など。得意技ならその人の負担にならない。みんないきなり講師になろうと思っただけではない、得意技で自分の活躍の場を作ってやると広がりが出る。また、身近な人が話した方がどこかの偉い人が話すよりも、みんなに伝わりやすいので相乗効果が生まれている。

中 口：外から人を連れてくるよりも自分にもできるのではないかと思える。3～4回通年でプログラムを作るコーディネーター役が必要ではないか。

村 上：少しずつ役割分担をつくり、参加した人から良かったと言ってもらえると、やった人にも成功体験になって良い。

中 口：子どもの学習で自己肯定感が大事と言われるが、ちょっとしたことでも褒めてあげるのが子どもに限らず大人にも大事。

福 嶋：住宅都市という大きなテーマだが、住

宅都市だからこそその難しさがある。定年を迎えてリタイアすると、地域とのつながりがあまりない。会社人間から地域人間になる、普通の人間にうまく転換できるといい力になるが、そうでないと今まで地域を支えてきた女性にとってすごく迷惑。地域活動については方向音痴が多い。地域での実際の活動から入ってもらうことがポイントだと思う。

福 嶋：NPOの活動をしたことない人が自分たちのところに来て「NPOはこうあらねば」と言われると、大変な反発が生まれる。シニア世代の地域活動のインターンシップで活動経験してもらい、活動の面白さを知ってもらうのが有効。

中 口：そういうもっていき方や工夫が必要。
正阿彌：ボランティアコーディネーターをしていると年配の男性が難しい。背負っているもの、肩書きを下してもらうには、集める時には固い名称、講演会とかフォーラムなど、皆で議論や対話ができる場を組み合わせることを何回も重ねていくと、悪い人たちではないので気づきが出てくる。年齢とか性別とか関係ないんだなと思えていくきっかけがある。講座を講演だけにせず、組み合わせることが大事。

中 口：生駒市でも寿大学の人達の活躍の場をつくってあげる。環境パートナーシップ組織の役割でもある。

では第1位、「待ち」から「攻め」へ。
ソフトクリームはニセコ町高橋牧場のソフトクリーム。営業するとかいろいろあるがどういうことなのか。

村 上：第11分科会で、話題提供者は3人とも「営業する」という話をしていて、できるだけ色々な所へ出向く。高島町では、住民が自分達で高島かんきょう塾を運営している。チラシをもってゲリラ的に

公民館や学校を訪ね、公民館の講座に取り入れてもらえないとか、学校の総合学習に取り入れてもらえないとか、企業にも行く。話だけではないということイメージしてもらおうと頼んでもらえる。行政の責任で活躍の場を広げてあげる。NPOだと怪しまれることもあるが行政は絶対的な信頼があるので私たちが声掛けに行くと怪しまれない。行政が営業するのが一番向いているのかもしれないと思う。

中 口：依頼が来るのを待っていてはだめということ。

村 上：校長会では話をしておくが校長先生にチラシを渡すだけでは下に下りていけないので、行政の中で担当の先生に伝えている。

中 口：場合によっては教育委員会とか通してから。学校では総合学習は内容が決まっている。それに対して自分達はこういうことしかできないんだと固定的なものを持って行っても受け入れられるのか。

村 上：最初は1時間とか2時間とか総合学習を繰り返していた。総合学習の時間が減ってきているが何とかしている。

正阿彌：村上さんはまず聞くということをよくされているのだと思う。聞く中で色々な経験があり色々なカードを持っていてこんな提案ができると気づき、聞きながらニーズ調査ができる。顔が見える関係ができると、後から「そういえば来た人がいたな、連絡してみようか」と思えるような雰囲気ができる。種をまくことができるのではないかな。

中 口：私の経験でも、このおじさん何だか分からないなと思われながらも接している間に、向こうのニーズが分かる。こういうことができるのではと提案していく、そういうスタイルがいい。

正阿彌：行政は絶対の信託があり、市民団体が動きやすくなるので、時には一緒にやると良い。見えてくるものが違うのではないか。

中 口：第10分科会にもあったが、市民と行政が同じものを見て価値観を共有することが大事という話が出ていた。首長のリーダーシップが大事だということはどういう議論をしても出てくるが、住宅都市の我孫子市長を経験された福嶋さんからどうぞ。

福 嶋：行政は信頼があると、それは活かすべきと思うが、市民のお上意識の一面では裏返し。夏になると節電のためにエレベーターが1機止まる。文科省の要請により1機止めていると貼り紙がある。わざわざ宣伝をする必要は本当は無い。文科省から言われても自分の判断でやっていると言った方が格好いいのに。きっと文句言う人がいるが、文科省の要請によりという納得するという感性があるから。首長のリーダーシップについていうと、一番大事なものは、時代を捉えてまちづくりの方向性をきちんと出して、それについて市民の合意をちゃんと作っていくリーダーシップだと思う。今、人口減少社会に向き合っている。合計特殊出生率がほんの少し上がっても必ず人口減少社会が進む。その時に今まで通りの仕組みをどうにか維持したい、それには人口減少を何とか止めなきゃ、と多くの自治体で言われているような気がする。そうではなく、人口減少は必ず進むのだから、人口減少の中で私たちが幸せになる仕組みにどう変えるか、私たちの行動をどう変えるか、その時に環境政策や環境問題の柱が出てくると私は思う。まちづくり、合意をきちんとするのがリーダーシップ。

中 口：人口減少はやむを得ないとして受け入れた上でどう変わるか。相変わらず良き時代の幻想にとらわれているから良くない。

福 嶋：住民の奪い合いをするのが自治体間競争の本質。もちろん出生率の数字を上げるのは私たちの将来のために必要。しかしそれは自治体間の連携でやることだ。

中 口：待ちから攻めのスタイルのとらえ方、自分の自治体だけで何とかしようというのではなく、色々なところとつながる、そういう攻めのスタイルが必要ということ。

福 嶋：もう少しいえば、攻めるにしても攻める方向が違ふととんでもないことになる。どういう方向で攻めるのかを首長が示して、そこでちゃんと合意を作るその過程が大事。

中 口：私が勝手に選んだ5つをご紹介したが、こういうキーワードで色々な市民とのつながりを作るヒントになる、これが3日間の議論で見えてきた。最後にもう一巡、今後、環境自治体会議だけでなく各自治体、あるいは市民や企業が何をすべきかを含めコメントをいただきたい。

福 嶋：先ほどの続きのような話になるが、自治体間競争を扱う分科会の中で環境問題があまり出てこなかった。人口減少社会でいかに住民を増やすかに意識が行ってしまった。連携は必要だが住民を奪い合う自治体間競争に行ってしまうと、例えば子どもの医療費の助成の競争になり、本当に必要なのか検証することなしに医療費をどんどん増やしていく、最悪の自治体間競争につながっていく。そうではなく人口減少を前にうまく小さくして質を高めること。公共施設にしても周辺自治体との共同利用など、建物としては減らしてその機能は維持し高め

ていくという発想。エネルギーも再生可能エネルギーの地産地消をどう進めていくか、うまく小さなエネルギーにして質を高める、ここで競争すると環境問題が中心に出てくるはず。

村上:いろいろな講座をやってきて近所のスーパーで参加した方から呼び止められたり、あの時こうだったけどどうだったっけと電話をもらうと嬉しくて、人のつながりもできて仕事しやすくなる、関係性ができていくことが大事だなと思う。ずっとやっていると、目先の省エネやごみ減量をなど浅いことを言っていると続かない。自分の心の腑に落ちていないと行動として続かないと思っている。今のままの価値観で暮らし続けていると持続可能ではないと、どうやって気づいてもらうかが大きな課題。身近な切り口から入っても少しずつ行動してもらえればいいなと思う。

正阿彌:まずは今の社会がこのままでは持続可能ではないという認識に立っていただきたいと思う。そこからの始まりではないか。今から新たなものを作っていくかなくてはいけない。ところが、どういう方向に進んでいけばいいのか、本当に正しいのか、環境にとっていいのか、私たちにとって幸せになれるのか誰も知らない。だからこそ自分だけでなく違う人色々な人とともにそういうものを作っていくかなくてはならない。時々変えてみるとか失敗も受け入れて進むことができないと、皆でまちをつくることができない。それを楽しくやるにはどうしたらいいか。違う人と一緒にいることは時々しんどくなるが、自分が広がっていく楽しみを得ながら変えていければよいと思う。

中口:答えはない。時代によっても地域によ

っても違う。答え探しの中で新たな発見したことが達成感、幸せにつながる。

福島:外にある答えを見つけるのではなく、皆で話し合っ合意を作る、それが間違えることがあってもいい。

中口:やって後悔した方がよい。色々な取り組みをアクティブにしたほうがよいと思う。



(壇上の様子)